

ウ 「課題関連図」作成後の取組（活用）について

「課題関連図」を作成した後、個別の教育支援計画、個別の指導計画を見直すとともに、授業改善を図った。

個別の教育支援計画については、支援の方向性（表1参照）を見直したことで、長期目標・短期目標に修正を加えた。長期目標には、主にコミュニケーション面に關わって、新たに「場や人を考えた適切な振る舞い」や「行動の調整」などに係る目標を追加した。また、短期目標には、「自己評価する場面の設定」に係る目標を追加した。

【個別の指導計画の見直し】

毎朝、「からだの時間」として行っている自立活動の時間における指導については、自立活動教諭と連携し、自己の障害を客観的に理解し、機能の保持の必要性を理解して、自ら取り組めることを目指した。

また、「中心課題」に迫る手段として、「毎時間の学習や、一日の生活を自己評価する中で、自分なりに良い点や改善点を見つけることができる。」という指導目標を後期の個別の指導計画に新たに追加し、学校教育全体を通じた自立活動の指導として行うこととした。

【学校教育全体を通じた自立活動の指導】

個別の指導計画の見直しを経て、学校教育全体を通じた自立活動の指導として「振り返りシート」（図5）を作成し、各授業の終わり5分を使って「振り返り活動」に取り組むこととした。なお、「振り返りシート」は、同じ学習集団の生徒にとっても必要であると考え、個々の生徒の実態に応じて書式を一部変更しながら作成した。

対象生徒には、まず「自分ががんばったと思えること」を記入することで、肯定的な自己評価につなげるようにした。また、生徒の記述内容には、必ず教師からのコメントを記入することで、他者評価を行い、自己評価と他者評価を合致させることによって、自己肯定感が高まるようにした。

さらに、授業における「振り返り活動」が定着してきたことから、1日を通しての「振り返り活動」も行うようにした。

結果、教科では「読むのをがんばった」、「書くのをがんばった」、「長さの測り方がわかった」、などの学習

に対する肯定的な記述が見られるようになった。また、1日の振り返りでは、「ありがとうと言ってもらえることをした」、「丁寧な掃除ができた」などの、自分の行動に対する肯定的な評価の発言が、以前よりも増加してきている。

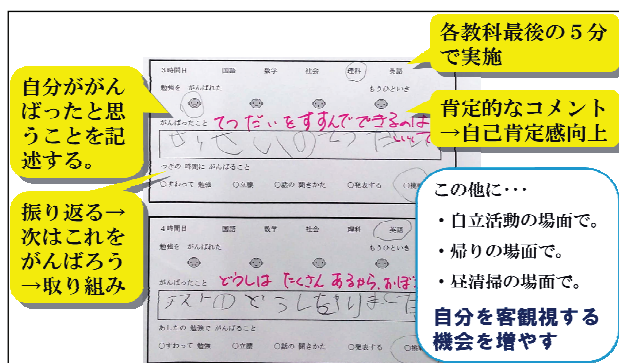


図5 作成した「振り返りシート」

【教科の指導目標の見直し】

各教科の指導目標についても、教科担当教師と協議し、見直しを図った。特に、国語科は「言語を通して思考する力を育てる」教科であることから、重点的に見直すこととした。具体的には、自己を客観的に捉える力（＝メタ認知）を高めるために、物語文の読解指導を通して、場面の情景を想像しながら読み進めることや登場人物の行動の変化から心情を読み取ることを進めることとした。

また、前期の指導場面において、自分の思いを他者に伝えたり、友達とやりとりする機会の設定が少なかったりしたことから「友達に説明すること」を新たな目標として追記した（表2参照）。

【情報共有と指導方針の共通理解】

主に学年団教師や教科担当者を中心に「課題関連図」の作成に取り組んだことで、学年団教師の生徒理解は、取り組む前よりも格段に進み、指導方針を共有しやすくなった。

また、教科指導担当者には、学習規律の統一、授業後の「振り返り活動」の実施、生徒同士のやりとり機会の設定など、指導方法についての依頼をする際に、「どうして、そうすることが必要なのか」という説明がしやすくなった。

表1 個別の教育支援計画における「指導方針」の見直し

修正前	…しかし、一方的な関わり方であったり意に沿わない状況になると活動を投げ出したりする、困った状況の時言葉で要求を伝えるのが難しい、経験が少ない活動に不安感があり取り組めない、などの課題もある。 本生徒の学習面を見ると、文字や数字の理解も深まり、生活の中で使うことも増えてきている。自分で決めたスケジュール、約束事を進んで実行する良さを生かし、事前にその状況での振る舞い方などを考えたり選択したりする機会を設けながら、一つずつ適切な行動がとれた、という自信や達成感を育んでいく。
修正後	…一方で、本生徒の課題として、<u>自己を客観視すること</u>、そして<u>自己の行動を自分で評価することがまだできていない</u>と捉えている。…それを受けて<u>自分の行動を自己調整することが難しく</u>、<u>一方的な関わり</u>になりがちとなっている。また、<u>自己肯定感が低く</u>、<u>自分に自信をもてていない</u>ことが挙げられる。その理由の一つとして、<u>自分の長所を自分で理解できていない</u>ことがあると思われる。そのことが、改まった場で自分の思いを言葉で伝えることを難しくしているのではないかと捉えている。 本生徒の学習面を見ると、…できている。本生徒及び保護者の将来の願いを考えたときに、<u>相手を意識した言動や、場に応じた言葉遣い、必要と思われることについて自分で伝えられる力、そして自己の行動を調整できる力が必要</u>と考えている。

表2 「課題関連図」を受けた教科の指導目標の見直し（例）

目標	指導内容・方法等	
前期	・小学校高学年程度までの漢字が混じった単語や文章を読める。 ・読み飛ばしに気を付けて、小学校1年生上巻程度の量の文章を、流暢に読むことができる。 ・小学校2年生程度までの物語文のあらすじをつかみ、内容を読み取ることができる。 ・出来事や気持ちを相手に伝えることを意識した、150文字程度の文章をパソコンで打つことができる。	・生活の中で使われる身近な漢字や、音読学習を進める中で、文中に出てくる漢字を中心に、繰り返し指導する。 ・音読の学習を継続して行う。読み飛ばしを減らすために、ビジョントレーニングも取り入れる。 ・場面描写から登場人物の気持ちを読み取ったり、自分なりの思いをもったりすることができるよう、様々な物語文を扱って指導する。 ・印象深い出来事を基に、時系列で想起しながら作文を書く機会を増やす。また、日々の出来事を日記にまとめる。
後期	・自分が見聞きしたことについて、100字程度で書いてまとめ、<u>友達に説明する</u>ことができる。 ・友達の発表を聞いて要点を捉えて<u>説明する</u>ことができる。 ・自分が書いた文章の間違いに、<u>自ら気が付いて直す</u>ことができる。 ・文学的な文章において、登場人物の行動から、<u>書かれていない事柄を具体的に想像して読み進める</u>ことができる。	・前期までに行ってきた「週末の出来事発表」を発展させ、話し合い活動につなげる。 ・定型表現で書いたり、話したりする中で、表現する力を高めるとともに、<u>相手に応じた話し方を身に付ける</u>ようにする。 ・教師を仲介としながら、簡単な<u>話し合い活動に慣れる</u>ようにする。 ・前期に行った「要約」の実際的な生活場面への活用として位置付ける。 ・友達の話を聞くときの態度についても、併せて指導する。 ・身近な事物について説明したり、日記を書いたりする活動を通して、文章を読み返して、推敲するという習慣を付ける。 ・間違えた箇所をどのように直せばよいのかということについては、教師と相談しながら進める。 ・「あらしのよるに」（講談社）にほいて、<u>登場人物の行動から想像を広げ、場面状況や心情を読みとる</u>ことができるようにする。 ・読解指導だけではなく、将来的に楽しんで読書する習慣が身に付けられるように指導を進める。

エ 本事例のまとめ

「課題関連図」を適用し、「学びの履歴」や「めざす姿」から中心課題を明確化し、課題相互の関連を考え、「指導仮説」を検討するという一連のプロセスを踏むことによって、対象生徒にとって、「今、どのような指導が必要なのか」ということを焦点化して考えられるようになった。このことから、生徒の「現在の姿」を捉えるには、自立活動のボトムアップ的な視点と3年後という近い将来、更にその先にある社会参加を見据えたトップダウン的な視点の両方が必要であると言える。

また、生徒の課題が整理・可視化されたことで、担任と学年団教師、教科担当者との意見交換機会が増え、各教師間で対象生徒の課題を共有することもできた。目指す方向性が具体化したことで、指導に一貫性が保たれるようになり、より効果的な指導を行うことができるようになった。

4 考察

1) 本研究の成果

「授業開発部」における9名の対象教師の取組から、以下の成果を得ることができた。

①目標設定のプロセスを通して妥当性を高める

重複した障害のある児童生徒の実態や指導すべき課題を明らかにするためには、図1の「情報一覧」に示すように多くの情報を扱う必要があった。校内「授業

研究会」の機会などにおいて「課題関連図」を作成した教師の語りなどから、多くの情報から「指導すべき課題」を抽出し、「課題関連図」を作成し、「指導仮説」を考えるプロセスを通して、教師の思考が深まることが確認できた。

本研究を通して、目標設定のプロセスを可視化し、多くのフィルターを通して思考することで、必要な情報が精査されるとともに、教師の気づきが促され、目標の妥当性を高めることにつながることが示唆された。

②「生活年齢」や「学段段階」を意識した目標設定へ

対象教師へのアンケート調査からは、「学びの履歴」を踏まえ、「めざす姿」を想定することで、「今まで気付いていなかったことに気付けた」という意見が多く聞かれた。このことから、児童生徒の過去から今、そして将来という時間軸を意識しながら、優先すべき課題を導き出す手続きが重要であると言える。

また、将来の「めざす姿」を教師が想定しながら指導計画等を作成することが、卒業後を見据えた「逆向きの授業設計」の授業づくりにつながると考える。

③協働することの重要性

「中心課題」を導き出す過程では、3年後の「めざす姿」を想定しながら、付せん紙を減らしている。この手続きは、優先すべき課題を導き出す重要な段階のため、複数の教師で作業を行うこととした。児童生徒に関わる

教師が、協議しながら付せん紙を減らす作業を遂行する過程において、課題の共有、指導の方向性の共通理解が進むと言える。対象教師からも、「日々の授業においても目標達成を意識した場面設定が行われるようになり、ティーム・ティーチングがより円滑になった」と報告されている。

また、自立活動を主とした教育課程を履修する児童生徒については、「自立活動の実態把握チェックリスト」の上では、判断がつかない項目も多数ある。そこで、学習のアドバイスのできる専門性の高い教師や自立活動教諭に相談し、各種の検査を担当も同席した上で実施し共通認識を持つようにした。こうした児童生徒については、「指導仮説」を検証しながら、日々の授業改善を進め、形成的評価を行うことが大切だと考えられる。

2) 本研究の課題

「課題関連図」作成の有効性を指摘する声が多くあげられた一方で、学校組織としての体制づくりや教師個人の専門性に関して課題が見られた。

①課題の「背景要因」を分析することの難しさ

「課題関連図」の作成において、多くの教師から「中心課題」を焦点化させることや「課題どうしの関連」を図示化し、矢印を付けることが難しいという声が多く聞かれた。この点については、自立活動教諭や校内における専門性のある教師と協働することで解決することが必要であると言える。一方で、発達の理解や認知の特性といったことに対する教師個人の専門性を高めなければ、分析的な思考につなげることは難しいとも考えられる。

②教育課程への理解を深め、授業実践に活用する

本研究では、自立活動の目標設定のプロセスを整理できた一方で、「自立活動の時間における指導」と「学校教育全体を通じた自立活動の指導」の住み分け、各教科と自立活動の関連付けの意識は乏しいのが実情である。教育課程の理解を深め、実際の授業場面と「課題関連図」をつなぐことが課題である。

3) 「根拠を語る」ために

本校においては、平成 28 年度からの校内研究の取組において、研究のゴールを「全ての教職員が、授業や指導の根拠を語ることができる」としている。

この「根拠を語る」という面から、本研究の取組を見ると、以下の 5 点が要点になると考えられる。

【根拠を語る上での要点】

- ①自立活動の 6 区分より実態把握がなされ、児童生徒の発達のゆがみを捉えている。
- ②「学びの履歴」が踏まえられている。
- ③児童生徒のつまずきの「背景要因」が分析されている。
- ④児童生徒の発達に加え、「時間の流れ」（生活年齢）と「環境設定」（地域生活）の二軸から目標設定がなされている。

〈結果として…〉

- ⑤一人一人の教職員が、上記の要点のつながりを説明する（＝担任以外も、担任同様に児童生徒について語る）ことができる。

また、平成29年度の校内「授業研究会」においては、「課題関連図」を作成した教師が、実際にプレゼンテーションを行い、どのように説明すれば、対本人・保護者・教師に分かりやすく伝えられるかということも検討してきている。学部の違いや「誰に・何を・どのように」語るのかによって、その要点のどこ重きを置くのかは変わってくるが、この 5 点は、欠くことのできないものであることを本研究を通して、確認することができた。

5 おわりに

平成 29 年 4 月に告示された次期学習指導要領では、自立活動の目標設定について、「児童又は生徒の実態把握に基づいて得られた指導すべき課題相互の関連を検討すること。その際、これまでの学習状況や将来の可能性を見通しながら、長期的及び短期的な観点から指導目標を設定し、それらを達成するために必要な指導内容を段階的に取り上げること」（注：下線部は筆者）と記載されている。

下線部は、今回の改訂で新たに加えられた文言で、自立活動の目標設定のプロセス、すなわち目標設定のための思考過程において、鍵となる重要な手続きである。

今後は、自立活動の目標設定の手続きを校内において共通理解することで、学校組織としての専門性を高めることにつなげたい。

6 参考文献

古川勝也・一木薫（2016）自立活動の理念と実践～実態把握から指導目標・内容の設定に至るプロセス～業後の視点から学校教育を考える．ジアース教育新社．

注：長崎県立諫早特別支援学校において作成された「自立活動の実態把握チェックリスト」は、上記文献の巻末資料として掲載されています。